

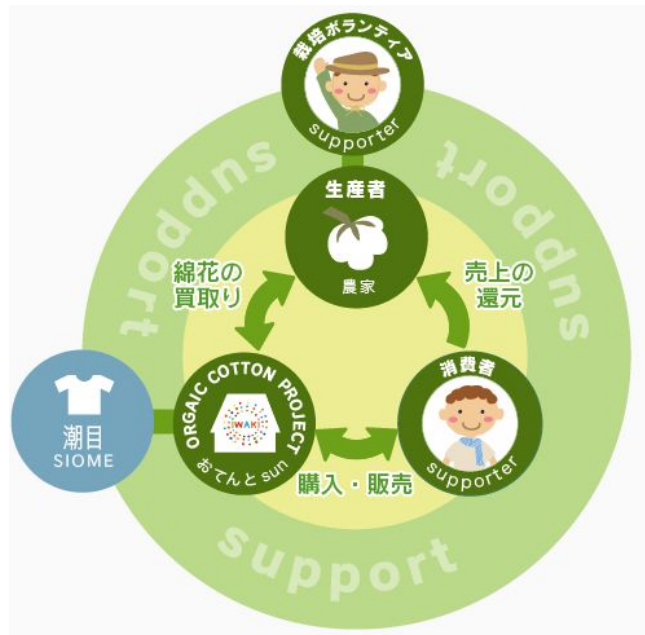
ふくしまオーガニックコットン プロジェクト

【プロジェクトの概要】

3.11 東日本大震災は、地震、津波、原発、風評とした複合的な災害を引き起こし、福島県の農業を取り囲む現状は厳しさを増している。

風評被害から、生産者が農業を断念するケースも多くみられ、後継者不足に拍車をかけ、耕作されない農地が増えた。地域経済を支えてきた農業生産は以前のレベルまで戻り切れていない。

そんな中、震災前より、福島県いわき市を拠点に地域づくり活動を行ってきた3名が中心となり、震災後に、東京のNPO法人JKSKが主宰する「結結プロジェクト 車座・交流会」を契機に企画を立案。独自の復興活動を行いながらも、復興への思いやいわきのビジョンを共有し、いわき市民自らが、市民のために行う地域づくりを協働し、実践していくために、コンソーシアムを形成し、「いわきおてんとSUNプロジェクト」を推進。地域住民、避難移住者、農家、事業者、地域づくり団体、NPO、首都圏企業、ボランティア、そして自治体など、様々な人と人の輪をつなぎながら、3つの活動（①オーガニックコットン栽培および製品づくり、②いわきコミュニティ電力、③復興スタディツアー）に取り組んでいる。



主な活動の1つである「ふくしまオーガニックコットンプロジェクト」では、2012年より、いわき市の農家を中心にコットンの栽培を始めた。食用ではなく、塩害にも強い綿を有機栽培で育て、収穫されるコットンを製品化する一連の取り組みで、地域に活気と仕事を生み出すことを目的としている。綿を含む繊維自給率が0%の日本において、福島から新しい農業と繊維産業を作り出したいと考えている。

なぜオーガニックで育てることにこだわったか。福島で育てているオーガニックコットンは、日本の在来種である茶色の「和綿」である。在来種は、品種としての特性が親から子、子から孫へと保たれる。土を汚さず、世代を超えて種として存続していくことが出来ることは、震災以降の福島で、循環型の社会を目指すいわきおてんとSUNの理念そのものだった。加えて、世界の綿産地では、化学肥料、除草剤、落葉剤など、農薬の大量使用により、環境への負荷や農家の健康被害が深刻な問題となっている。こうした状況を改善しようと、先進諸国では、農薬や化学肥料を使わないオーガニックコットンの需要が高まっている。和綿は、他の品種に比べて綿が小ぶりで、一度にわずしか収穫出来ない大変希少な綿である。素材そのものの色から生まれる生成りの温かみは、茶綿ならではの特徴となっており、染色では決して表せない自然本来の色味である。

同プロジェクトでは、農家、市民、学校、NPO、地元企業など、様々な人がコットン栽培に参加することで、つながり、楽しみながら、理解を深め取り組んでいる。2012年には、市内15か所、約1.5haの栽培地に、首都圏などから延べ1,500人の方々が訪れ、収穫は約300kgにのぼった。2013年、2014年は、栽培地、栽培面積も2倍になり、ボランティア参加者も大幅に増えた。いわき市内の小中学校でも12校が参加。春の種まき、夏の草取り、秋の収穫と、年間を通じて有機栽培でコットンを育てるとともに、復興地のこれからについて考える機会となっている。

また、収穫したコットンからつくったコットンペイズを家族や友人にプレゼントしたり、自分で育てたりすることで、その輪がさらに広がっていくプロジェクトである。種を蒔いた年の秋以降、生育・収穫したコットンを「ふくしまオーガニックコットンプロジェクト」に送ると、その翌年、綿製品となって福島から世界に羽ばたいていく。

いわきで栽培、収穫された素材を使ったものづくりを体験的に学ぶ場を提供することで、子ども世代への教育だけでなく親世代への波及効果も生み出せる。また、こうした取り組みを全国に情報発信することで、教育現場における地域社会の課題の共有とその解決に向けた取り組みの共有という新たな環境教育の形を提案できるものと考えている。

福島で蒔いた種は、様々な形で確実に芽を出し始めている。今では農家、市民、学校、企業CSRなど、たくさんの方々に参加いただいております、コットンの栽培体験だけでなく、活動を通して生まれる「コミュニティのつながり」を楽しみ、実感していただいている。

